

7. 明治期における徳島の新聞小説—『徳島新報』（1）

富塚 昌輝

はじめに

本研究では、明治期の徳島県における新聞小説の受容について調査することを目的とする。日本近代文学の歴史において新聞小説が大きな役割を担ったことについては既に多くの研究で明らかにされている¹。しかし、これらの研究の多くは、東京や大阪で発刊された新聞に掲載された新聞小説を対象としたものであり、新聞小説研究の進捗状況に大きな地域差があることは否定できない²。

各地域の中でどのような小説が流通し、そこにどのような心性が描き込まれたのか、換言すれば、地域読者の新聞小説受容の様態について考えようとするならば、各地域で発行された新聞に掲載された新聞小説を取り上げる必要があるだろう。また、各地域の新聞小説には、それぞれの地域の人・物・文化が描かれているとも考えられる。

以上のことは、本研究を進めるに当たっての仮説であり、その具体的なあり様については、今後の調査の進展を俟って考察すべき問題である。そこで本研究では、上記の目的を実現するための基礎的作業として、徳島で発行された新聞小説を採取し、目録を作成する。その取り掛かりとして『徳島新報』を対象にして新聞小説の目録を作成する。

『徳島新報』は、1888（明治 21）年 11 月に創刊された新聞である。創刊号については確認することができなかったが、1888 年 11 月 13 日発行の第二号に拠ると、発行人兼編輯人は小野廣太郎、印刷人は高砂竹次郎、発行所は徳島県名東郡徳島富田浦町三千六百十二番屋敷の徳島新報社であった。定価は一枚六厘、一ヶ月前金五銭六厘である。『普通新聞』主筆の吉田憲六が徳島改進黨であったのに対抗して、自由党員の石田園坡が創刊した新聞が『徳島新報』であった³。

本稿が行った調査は、1888 年から 1892 年半ばまでの範囲である。以降の分は別稿に譲るが、今回の調査範囲の中で気になった点を摘記しておきたい。

まず、掲載作品の類型として、忠義孝行物（「孝子の美談」「山賊」）、青楼でのやり取りを中心とした人情話（「徳島八景」「今太閤出世鑑」「桂男」「園瀬の蛸」）、仇討物（「血汐の痕」「初戎」）、侠客物（「勇肌」）、白波物（「草の錦」）、御家騒動（「日高の鐘」「四国遍路聞取書」）等、芝居や戯作によって庶民に親しまれた話型が多く用いられていることが指摘できる。

¹ 高木健夫『新聞小説史 明治篇』（1974、国書刊行会）、本田康雄『新聞小説の誕生』（1998、平凡社）、山田俊治『大衆新聞がつくる明治の「日本」』（2002、日本放送出版協会）、土屋礼子『大衆紙の源流』（2002、世界思想社）等参照。

² ただし、本田康雄『新聞小説の誕生』（前掲）には「地方紙の新聞小説」（269 頁-304 頁）の章が置かれ、『熊本新聞』が取り上げられている。

³ 日本新聞協会編『地方別 日本新聞史』（1956、日本新聞協会、394 頁-395 頁）

また、本稿で採取した新聞小説では、記者名を明記しないものが多く見られた。明治末期についての証言であるが、徳島新聞顧問の横山春陽は、「明治末期の新聞連載小説は、「毎日」では社内の筆達者な記者連にいくらかの原稿料を出して書かせていたのに対して、「日日」では地元の小説家に郷土の物語に取材したものを書かせたので評判がよかった。」と述べている⁴。この証言の裏付けは取れていないが、もし横山の言う通りだとすると、徳島の新聞小説においては小説家の個性を表現することよりも、読者の嗜好に応えることが優先されていたと考えられる。徳島の新聞小説に類型的・通俗的な物語が多いことも、こうした点から説明することができる。

横山は、「郷土の物語に取材したもの」の評判が良かったことについても述べていたが、徳島の新聞小説では、物語の舞台が徳島であるものや主人公の出身地が徳島であるものが少なくない。この点も、徳島の読者の嗜好を反映したものと考えられる。徳島出身の主人公が、立身出世や出張などの目的で県外に出る小説もいくつかあるが、それらの主人公が多くの場合、物語の終盤に徳島へ帰ってくるという筋書きを取っていることも興味深い（「勇肌」）。新聞小説の種が記者周辺の出来事や見聞に拠っていることもその理由の一つであろうが、物語内におけるUターン現象は、徳島という場の心的な持続性を強化する効果を持っているとも言える。徳島の新聞小説において、徳島は出郷の地であるとともに、成長後に帰郷する地でもなければならない。

加えて、Uターン型の物語においては、徳島の人間が他の地域と接触し、そこから徳島を自照する契機が生じたり、徳島の矜持が示されたりするという点についても指摘しておきたい。「冬の月」では、山本吉蔵が「徳島の商人は.....愚痴じやない、伶俐だ、伶俐が過て狡猾い、これで団結の気象に乏しい、活馬の眼を抜く、人は起よが倒れようが、頓着はない、関係はしない、これが間違ひだ」と述懐して、上京する。上京が契機となって、徳島の商人の姿を外から見る視座が生まれたのである。また、「勇肌」には、東京の火消し連中から「アリヤ彌蔵と言つて上方者、腰抜け野郎の素寒貧サ」と罵られた彌蔵が、「産れは阿波でも、何所にもしろ、吾妻に負けない気象」を發揮し、「吾妻育ちのお侠客、水道の水を産湯に仕て洗ひ掲げた江戸子も田舎に育つた俺でも男に男の換りは無い、仮令五人が十人でも相手は撰ばぬ腕づくなら決して逃げも走りも仕ない田舎漢の腕試し食つて見よ」と言いながら、東京者をぶちのめす場面がある。ここでも、喧嘩早くて有名な東京（江戸）の火消しとの接触によって、徳島の人間の気象や気概が示されるのである。

以上の概観によっても、徳島の新聞小説の研究が、新聞小説研究一般や地域の間人・文化研究に対して興味深い話柄を提供するであろうことは容易に見て取れる。新聞小説の調査・収集作業が必要と思う所以である。

『徳島新報』の新聞小説目録

以下に『徳島新報』に掲載された新聞小説の目録を作成する。記事の採録にあたっては、

⁴ 『地方別 日本新聞史』前掲、396頁

鳴門教育大学附属図書館が所蔵しているニチマイ製作のマイクロフィルムを用いた。字体は通行の字体に改めた。

【題名】孝子の美談

【記者】未詳

【掲載日】1888/11/13

【梗概】和三吉は母の看病に努めるが、次第に活計が苦しくなる。和三吉は、父、妻、長男の死、妹の離縁、母の病と不幸続きであることを嘆く。和三吉が母の快癒を一心に神に祈ったのが通じたものか、母の病は次第に良くなる。和三吉は、母を安楽に暮らさせようと家業に励む。

【備考】「(つづき)」。欠号あり。

【題名】冬の月

【記者】未詳

【掲載日】1888/12/1、12/4

【梗概】三木照近が東上する同夜、佐古の住人の山本吉蔵が橋の上で月を見ながら述懐めいた独り言を吐く。吉蔵は「徳島の商人は(中略)団結の氣象に乏しい」と嘆くが、「述懐はいらない、意見を定め、思想を確め、断行するが必要だ」と決意し上京する。(以上12月1日分)吉蔵の弟の信次郎は浮世を捨てて桑門の遊びを好む雅人である。信次郎が父の数寄屋にやってくると冬月楼の小冬が声をかけ、二人で茶室へ入る。(以上12月4日分)

【備考】「(続)」。欠号あり。

【題名】徳島八景

【記者】未詳

【掲載日】1888/12/13

【梗概】徳島の富街にある貸席の小座敷に、トランプの勝負に疲れた様子の徳島紳士と

三吉という芸者が対座している。三吉は紋日の用意のために二百円の金を紳士にねだる。

【備考】副題「富街の雨(上)」。欠号あり。

【題名】夢中筆記 今太閤出世鑑

【記者】未詳

【掲載日】1889/1/29

【梗概】日太郎が春虫と深い仲になる前のこと、日太郎は本店から命令で上京する。本店での用を終えた日太郎は、店の番頭等と芝の売茶亭で懇親会を開く。この席に呼ばれた芸者の中で「まつこ」という芸者が日太郎の目に止まり、二人の仲は深くなる。本店の用事を終えた日太郎は、東京を去ることになり、まつこと又の逢瀬を約束して別離の路につく。

【備考】「第八席」。欠号あり。

【題名】勇肌

【記者】未詳

【掲載日】1889/4/5、4/7、4/9、4/11

【梗概】人力車夫の彌蔵は、日本橋筋で深川の火消しの集団とすれ違いざまに、「上方者、腰抜け野郎の素寒貧」と陰口を叩かれる。阿波の産まれで東京者に負けない氣象の彌蔵は、火消し五人を相手に喧嘩を吹きかける。彌蔵は二人を負かした後、群衆の中に駆け込んで姿をくらます。彌蔵の親分の小金は、火消し連中からの掛け合いを用心して、彌蔵を故郷に帰すことにする。

(以上4月5日分)中山道の熊谷宿から深

谷宿の間にある大杉林で、彌蔵は二人の賊から身ぐるみ脱いで行けと脅される。彌蔵が取れるものなら取ってみよと大手を広げると、賊は恐れをなして林に逃げ込む。その後、木曾路から美濃路を経て京都へ至り、さらに大阪を経て徳島に帰ってくる。(以上4月7日分) 彌蔵は徳島に帰ると佐古町に住む親分の左官職である儀助の家を訪れる。その後、彌蔵は火消しの組に加入し、彌蔵の勇み肌で惚れたお花と駆け落ちして夫婦となる。彌蔵は大酒が原因で病にかかるが、お花の看病の甲斐あって全快する。一月四日、県庁前で行われた火消しの出初めで、彌蔵の組と他の火消し組が喧嘩し、彌蔵の親分が禁錮となる。一年の後、彌蔵等は美麗に着飾り、徳島橋で親分の出獄を大々的に迎える。(以上4月9日分) 親分が放免になって後、彌蔵は親分に暇をもらい、村へ帰って竹の家という小料理屋を開く。しかし、火消しの組を開きたいという素志は捨てがたく、種々の奔走をして「く組」を設ける。彌蔵のく組は子分三十名に及ぶ組になり勢力を増すが、彌蔵は再び病にかかってしまう。盆踊りの時、く組の子分が酒を飲んで新町辺へ出た際に、鏡台寺前の若者等と喧嘩となる。その時、く組の小頭松谷佐吉が相手に散々に打ち叩かれ、それを助けるために彌蔵が病身をおして駆けつける。彌蔵の病は益々重くなり、子分等が八坂大明神や方の上の権現神社へ祈願するが叶うことなく、彌蔵は三十一歳でこの世を去る。人々は侠客の死を悼み涙を流す。

【備考】「第九演」～「第十二演」。欠号あり。

【題名】桂男

【記者】未詳

【掲載日】1889/4/27

【梗概】川鳥楼の主人は若湊に対して、末を誓った橋次との仲を諦めて鈴木の方へ行くよう意見する。橋次は明治13年11月10日に鼓楼へ婿入りする。橋次と小辰は仲睦まじく暮らす。二年の後、白菊楼の菊江が足抜きして姿をくらすという事件が起きる。菊江の追手として橋次が選ばれ、橋次は和歌山へ発足する。

【備考】「第八回」。

【題名】日高の鐘

【記者】未詳

【掲載日】1889/6/21、6/23、6/25、6/27、6/29、7/17、7/19、7/21、7/23、7/25

【梗概】築山五郎は、静一郎が寝ているはずの客間に忍び込んで、刀で寝ている男を突き殺す。日高の邸へ帰って鐘之進に討ち取った首を差し出し、鐘之進はその首を実検する。(以上6月21日分) 鐘之進が首を検めると、その首は静一郎のものではなく、名も知らぬ他人の首であった。鐘之進は築山五郎の失策を責め、五郎を斬り殺す。(以上6月23日分) 清蓮寺の小坊主である良念と観月が掃除のために客間に来てみると、客人の首が無くなっている。客人は、観念和尚の親類である服部幾右衛門であった。

(以上6月25日分) 安政元年の11月、日高の陰謀に助力する早鷹権十郎は、妻の松江から日高の騒動を利用して日高家に復讐する計画を聞かされる。権十郎は松江の意見を聞き入れ、鐘之進を討とうと決心をする。

(以上6月27日分) 相原静一郎は清蓮寺の方丈の床下に隠れながら、父の敵の手がか

りを探している。山中源一が静一郎の元を訪ね、山崎村で起こっている租税への不平に基づく蜂起をどのように鎮撫するか的重要な評議が城中で行われる旨を伝える。(以上6月29日分) かつて日高鐘之進の妾であったお清は、恋人で役者の嵐美顔と夫婦気取りで暮らしていた。そこへ、美顔の妻であるお巻が訪ねてきて、美顔をめぐって言い争う。(以上7月17日分) お巻は、自分を捨てるかお清と縁を切るか二つに一つと美顔に迫るが、美顔はお清にも義理があつて別れられないので二人仲良く暮らしてくれと頼む。お巻は、美顔の言葉を聞き、お清と二人で支えていこうと言う。和歌山での芝居も一段落し、美顔はお巻とお清とともに大阪へ帰る。お巻はお清に嫉妬し、お清を追い出す思案をめぐらす。(以上7月19日分) お巻とお清は大川の花火見物をしてながら天満橋までやってくるが、夕涼みの人々の雑踏にもまれて、二人は離れ離れになってしまう。その時、二三人の人がお清を捕まえ欄干から大川へ投げ込む。天満橋の下手の方に、小さな船を浮かべて横平が述懐していると、流れてきたお清が船にぶつかる。(以上7月21日分) 横平がお清を船へ上げ介抱すると、お清は息を吹き返す。横平はお清を家に連れ帰り、清子が大川へ投げ込まれた仕儀は、お巻の計略ではないかと言う。お清は、横平の言うことに納得し、横平の家に泊まる。(以上7月23日分) 翌朝、横平は隣家のお松に頼み、酒肴の用意をする。横平は、誰がお清を大川へ投げ込んだのかを詮索した上で、仕返しをしようと言う。(以上7月25日分)

【備考】「廿二撞」～「廿六撞」、「卅五撞」～「卅九撞」。欠号あり。

【題名】園瀬の蜚

【記者】未詳

【掲載日】1889/6/21、6/23

【梗概】某楼の二階座敷に緒里信吉、芸妓のお岸と毎吉の三人が座談している。お岸は信吉にお鹿の醜聞を吹聴する。舞台は変わって、富田町の火口楼の二階座敷。信吉はお鹿の変心に対して恨み言を言う。お鹿は信吉の言い分を否定するが、信吉はお鹿の心次第では、身請けの話を白紙に戻す決意であると言う。(以上6月21日分) お鹿は自分が変心した証拠を示すように信吉に言う。信吉は、お鹿の変心をあくまで言い立て、縁を切る。信吉は学問修業のため上京する。(以上6月23日分)

【備考】「(五)」、「(六)」。欠号あり。

【題名】博多帯

【記者】未詳

【掲載日】1889/7/17、7/19、7/21

【梗概】徳助は伯父の仁兵衛に30円の路用を借り、半分の15円を仁木新三郎に恵む。新三郎はこの金を受け取り病身の母を連れて福島県に行く。徳助も東京へ向けて木曾路を急ぐが、道中で播磨の人と懇意になり同道する。徳助はこの人に荷物を預けて湯へ行くが、湯から帰ってくると播磨の人は徳助の荷物と共に消えてしまう。巡査が取り調べに来て徳助に姓名を尋ね、徳助が大阪本町三丁目白井松助の召使であると答えると、巡査は徳助に尋問したいことがあると言って警察署へ連れて行く。(以上7月17日分) 仁木新三郎は福島県へ到着し、伯父から家督を譲り受ける。新三郎は徳助

への報恩のために東京の材木店の最上仁兵衛方を訪れる。ここで徳助が警察署に拘引されたことを聞き、新三郎が警察署へ行くと、既に大坂の警察署に送られたと言う。新三郎は大坂へ行き、徳助の身柄を引き受けるために奔走するが、警察も聞き届けず、白井松助も承引しない。(以上7月19日分) 代言人の橋啓一郎は、仁兵衛の慈愛、芸妓栄子の貞操、新三郎の義心に感じて、徳助の弁護を引き受ける。啓一郎は裁判所へ出頭し、罰金による徳助の放免を願い出る。この後、新三郎が賀登若楼に掛け合い栄子を身請けし、徳助の元へ送る。白井松助によると、徳助の失踪届を出したのも、願ひ下げを断ったのも、店の奉公人への殷鑑のためであったという。徳助は再び松助の店へ勤めることとなり、翌年上州呉服売の商売をはじめ、徳島へも時々やってくる。

【備考】「(続)」。欠号あり。

【題名】破戒

【記者】未詳

【掲載日】1889/12/28

【梗概】京都の寺院で書記を召し抱えることとなり、河内源吉が住み込みで働くことになる。源吉は金沢の生まれで、十二歳の時に父母が亡くなり、二十歳の時には家財が尽きてしまう。源吉は、芸能を修めて一人前の男になりたいと思い立ち、京都へ上ろうと思い立つ。上京の途次、五六人の男に囲まれ、路用と衣服を奪われる。源吉はなすすべもなく、全て宿世の因縁と諦めて琵琶湖に身を投げる。

【備考】「三」。欠号あり。

【題名】戊辰餘談 血汐の痕

【記者】梅亭述

【掲載日】1890/1/27、1/29、1/31

【梗概】武道指南役の溝田惣十郎が地蔵の前を通りかかった時、地蔵の陰から坂本蕃六郎が現れ、惣十郎を斬り殺す。蕃六郎は溝田の邸へ行って家内に忍び込み、溝田の娘雪子に恋情を伝えようと襖を押し開く。

(以上1月27日分) 蕃六郎は、雪子に対して自らの思いを告げるが、雪子は幸十郎への操を守って断るとともに、家主の留守に忍び入った不届きを責め、短刀を抜いて身構える。蕃六郎は、雪子を斬り殺して、逃げ去る。(以上1月29日分) 蕃六郎のために深手を負った平松幸十郎は、京都へ移って療養し、以前の身体に戻る。明治4年6月、幸十郎が夜具の上で眠っていると、傍らの蚊ふすべの煙とともに雪子の幽霊が現れる。雪子は、蕃六郎の横恋慕によって惣十郎と自分が殺されたことを訴える。(以上1月31日分)

【備考】「第十九」～「第廿一」。欠号あり。

【題名】山賊

【記者】未詳

【掲載日】1890/3/10、3/12

【梗概】渡軍太夫は山賊の群れの中に入り込み、刀を抜いて闘う。山賊等は逃げ去るが、庚申堂の中から男が現れ、二人は勝負する。男は、軍太夫の刀を打ち落とすと、自らの非礼を詫びる。男は、八年前に殿を見捨てて行方をくらましていた尾形信行であった。尾形は、主人の松平公の振る舞いの故に見捨てたのだと言う。(以上3月10日分) 尾形によると、松平公は国の鎮定のために尽力した家臣たちに褒賞を行わず、

婦女にばかり心を懸けたという。それを見かねた尾形は、主公の元を去り山に隠れたのであった。尾形は、今日ここで邂逅したことは隠密にして欲しいと頼む。山を下りた渡が、尾形と会った次第を残らず松平公に伝え、松平公は自らの過ちを悟り、礼を尽くして尾形を迎えることになる。尾形もその礼に感じて、以後忠勤に励む。(以上3月12日分)

【備考】「(中)」、「(下)」。欠号あり。挿画は「梅霞」。

【題名】争ひ

【記者】未詳

【掲載日】1890/3/16、3/19、3/22、3/24、3/26

【梗概】徳島寺町にある青楼の蓮葉楼の主人や番頭等は、客に娯楽を勧めながら自らは酒色に溺れることなく商売に励んでいることに嫌気がさす。楼主は芸妓狂いを始め、貯蓄を湯水の如く使って芸妓に我が侬放題させるので、得意客は頭を悩ませる。蓮葉楼の衰退を機会とし、富田中園辺にある十字楼は洋館造の建物を建て、芸妓は総て束髪の薄化粧、洋語交じりの言葉を用いさせて、得意客を取り込もうと画策する。(以上3月16日分) 十字楼の芸妓基吉は、接待の丁重さや、景品進呈を謳った広告文を出し、巧みに客を取り込む。蓮葉楼は、客を十字楼に取られ、対抗心を燃やす。(以上3月19日分) 十字楼は七日間の清元会を開催する。新栄町の常盤座は満場の賑わいであるが、表では中に入れなかった群衆が十字楼の悪口を歌いながら騒ぎ出す。騒擾に妨げられ、十字楼の清元会は途中で打ち切られる。(以上3月22日分) 十字楼の清元会を妨害したのは蓮葉楼の顧客達であつ

た。彼等は、基吉が十字楼で清元の論判をしようと言った言葉に従い、十字楼に押しかける。しかし、十字楼は門を閉めきって応じる様子がない。そこへ十字楼の得意客が夫婦連れで青楼を訪れる。蓮葉楼の客達は、この夫婦をからかい、それを見かねた基吉が表戸を開けて出てくる。(以上3月24日分) 表戸から出てきた基吉に、群衆は勢い込んで詰め寄り、その様子を見て基吉は又家に入ってしまう。怒った群衆は、十字楼に石を投げ込み、ガラスの割れる音がする。この物音に驚いて目を覚ますと、これまでの出来事は記者が編輯に疲れて見た夢の中の出来事であった。よって、次号からは夢と題する小説を掲げる。(以上3月26日分)

【備考】「第二回」、「第三回」、「第五回」～「第七回」。欠号あり。挿画は「梅霞」。

【題名】夢

【記者】未詳

【掲載日】1890/3/26、3/30

【梗概】夢に関する考証の後、表題の夢は正夢か咸夢か思夢か寤夢かと読者に問う。

(以上3月26日分) 顕官の身分であった男が、免職となり、妻とも別れ、落ちぶれて親類の居候となる。活計の術もなく、途方に暮れる。今は浮沈転変の世の中で、かつて官界につかなければ今の難渋もなかったのではないかと嘆く。(以上3月30日分)

【備考】「緒言」、「(下)」。欠号あり。3月30日の記事には、「倅次号よりは紙幅も広がり毎日刷りの大改革小説記者も役替り」、「●御披露 次号即ち四月三日発兌の徳島新報には新案の小説「桜時処女の仇

討」、「しぐれ」の二題を続々掲出すれば愛読の程偏に願ふになん」とある。

【題名】ちる花

【記者】松茂みどり

【掲載日】1890/8/7

【梗概】人足達は、桜木左門の屍にすがりつく屋敷のお嬢様を引き離し、屋敷に送り届ける。お嬢様は屋敷へは帰らないと言い、いっそ殺してくれと叫ぶ。

【備考】「其三（二の下）」。欠号あり。

【題名】白鴛鴦

【記者】未詳

【掲載日】1890/8/7

【梗概】お柳は母と佳三郎への手紙を書き、自らは自殺しようと心算する。お柳が先祖代々の墓に参り、亡父の石塔の前で念仏を唱えていると、佳三郎がやってきて、短刀でお柳を突き殺す。佳三郎は、自らも腹を切ろうとするが、その時誰かがやってくる足音が聞こえたので、その場を去る。乳母のお竹が墓所の前に来るとお柳の屍がある。お竹はお柳の懐から百円を探り当て、どこかへ去って行く。

【備考】「(九)」。欠号あり。挿画は「月峰」。

【題名】四国遍路聞取書

【記者】未詳

【掲載日】1891/7/26

【梗概】殿の奥方を毒殺する計画が失敗する。鳴門派は殿様を殺害するか、自らの子を殿様に押しつけ御家横領するか、二つに一つが実現するような計画を立てる。殿様が江戸へ参勤する道中、鉄砲の音がして殿

様の乗り物に弾が飛び込む。鉄砲を担いで逃げ去る浪人体の男を、若侍が追いかけて浪人と揉み合う内に、浪人は崖から落ちる。これらの様子を窺っていた浮浪者体の男は、浪人の落とした鉄砲と手紙を拾い取る。

【備考】「つゞき」。欠号あり。

【題名】新形走馬燈

【記者】仰天子

【掲載日】1891/8/1、8/8、8/9

【梗概】宮古堂の宗七は、三百円の儲け話が気に掛かり、店の仕事に手がつかない。宗七の元に音松がやってきて、二人で錢儲けの相談をする。宗七は、新聞広告を取り出し、三百円の賞金が懸かっている尋ね人の王丹田の居場所を知っていると云う。二人は諏訪山の新鮮亭に場所を移す。（以上8月1日分）宗七は主人から暇を出される。宗七が三百円欲しさに近所を騒がせたことに対して、主人は近所の徳義を重んじる。宗七の後には、良助という身持ちの悪い男が勤めることになる。良助は、宗七の所為を知り、宗七の取り逃がした三百円を丸取りしようと画策する。（以上8月8日分）良助は足袋屋に取り入る策略として、まず職人の広太郎を取り込もうとする。次第に広太郎と仲良くなり、足袋屋の内情を聞き出す。広太郎は何か隠している風であり、また足袋屋に時折神戸から手紙が届くのも、良助には足袋屋が誰かを匿っているように思われる。（以上8月9日分）

【備考】「第二回」、「第八回」、「第九回」。欠号あり。

【題名】草の錦

【記者】浪花 梅亭主人

【掲載日】1891/12/17、12/19、12/12

【梗概】錦之助は金財布を小桶の中に隠す。捕吏が錦之助を呼び止めようとする、錦之助は捕吏を突き倒して逃げ去る。同じ頃、難波橋から女が身投げしようとする処を、通りかかった江戸者が助ける。二人が顔を合わせると、お互い顔見知りであった。女は阿波重のお花であり、男は江戸の時五郎親方であった。(以上12月17日分)時五郎はお花の話を知る。お花が嫁入りした荷受問屋の大和屋伊三郎は、五百両を預かっていたが、その金で堂島の米相場に手を出し、店の金も合わせて都合七百五十両の損を出してしまう。お花が実家の爺さんに相談すると、爺さんは大変に腹を立て、一両も貸してくれない。おめおめと家に帰ることもできず、お花はいっそ死んでしまおうと観念したのであった。様子を知った時五郎は、お花を連れて自分の家へ連れ帰るが、その帰り道に道に落ちていた金財布を拾う。(以上12月19日分)錦之助と松兵衛が口論の最中に、阿波重の手代が訪ねてくる。手代は松兵衛に、先日お花がお世話になったお礼として酒代を渡す。錦之助はお礼の金を自らの懐に入れてしまう。錦之助は、松兵衛の小桶に入れた五百両の財布を返してもらおうと強請る。(以上12月22日分)

【備考】「第二拾六回」、「第二拾七回」、「第二十九回」。欠号あり。

【題名】枯柳

【記者】鶴の舎主人

【掲載日】1891/12/22

【梗概】今年の筆納めに「アッサリ幕の一狂言」を書く。

【備考】「口上」。欠号あり。

【題名】宝船

【記者】浪華 まきの家半酔

【掲載日】1892/1/1

【梗概】徳島西船場町に住む福澤富三郎は、年始の挨拶に出かける。細君は、旦那の短気に辟易しながらも、旦那の機嫌を取る。細君は去年東京新橋で菊助の名で芸者勤めをしていた。その時、福澤は衆議院のため出京中であり、二人は知り合う。菊助はその後、大坂北新地での勤めを経て、徳島富田町へやってきて菊栄で名弘めする。ここで二人は再び顔を合わせ、福澤は菊栄を落籍し、菊栄はお菊と名を改める。しかし、旦那の短気に気後れがちのお菊は、次第に気が塞ぐようになる。佐古町辺で骨董店の茶筌堂を開いている呑楽は、旦那の取り巻きとして家に入出入りしているが、元日にも挨拶にやってくる。お菊は呑楽と屠蘇を飲みながら、旦那に対する不平を言う。呑楽は、円山応挙が描いた宝船の掛け軸を出し、これで旦那の機嫌を取ると言う。呑楽は曾我の対面の芝居で旦那の機嫌を取ろうと画策する。旦那が帰ってくると思いの外の上機嫌であった。呑楽の持ってきた応挙の宝船が偽物であることを知り、本物の応挙の宝船が手に入ったことを喜んでいて。旦那は元日から悪魔坊主の厄払いができたと喜ぶ。

【題名】初戎

【記者】浪花 梅亭主人

【掲載日】1892/1/5-1/10、1/12-1/17、1/19-1/24、1/26-1/30、2/2

【梗概】鷲塚平馬は園吉に百両の金を差し出す、園吉は義理がかかるのを嫌い、そ

れを戻す。鷺塚は園吉に口説きかけるが、園吉は神への願掛けは裏切れないと言い、その場を逃れる。園吉が外へ出ると町髪結の梅吉と出くわす。(以上 1 月 5 日分) 梅吉は以前武士であったが仔細あって現在は髪結をしている。梅吉が中雪という青楼で髪結いをしていると、お万という京都で知り合った芸妓が、梅吉の懐に艶書を差し込む。梅吉が懐から艶書を出して投げ捨てると、お万はそれを拾ったまま去る。(以上 1 月 6 日分) お万は鶴屋へ行き、鷺塚に園吉と梅吉との仲について告げる。お万は、今夜難波の十八庵で逢いたいという園吉が梅吉に渡した艶書を鷺塚に見せる。梅吉がお万に投げ返した艶書は、お万の投げ文ではなく、園吉のものであった。(以上 1 月 7 日分) 十八庵の離れで園吉と梅吉がこれまでの身の上を語り合う。梅吉は摂州赤ヶ崎の家臣で二百石を取った武士であった。園吉と梅吉は許婚同士であったが、赤ヶ崎の家臣で三百石を取る鬼島武雄が園吉に懸想し、梅吉の父小泉惣左衛門に結婚を頼み込む。惣左衛門がそれを断ると、武雄はそれを恨みに思って惣左衛門を短銃で撃ち殺し、逐電する。(以上 1 月 8 日分) 事件を取り調べた藩は、飛び道具であっても横死したのは条目に反するとして、小泉の家名を退転にする。梅吉は仇を討つため髪結に身をやつして、鬼島を探索する。(以上 1 月 9 日分) 惣左衛門が撃たれた夜、園吉が小鳥の籠を取り込むため庭に行くと、二人の狼藉者に連れ去られる。大坂堀江の宿屋へ連れて行かれ、そこで鬼島武雄がやってくる。鬼島は園吉の気を引くため芝居見物に連れ出すが、園吉は便所へ行くと偽って逃げ出す。籠を雇って帰ろうとすると、籠

かきの悪巧みによって長崎に女郎奉公に売られてしまう。園吉は、遊女ではなく芸妓として雇って欲しいと頼み込み、芸妓として勤める。(以上 1 月 10 日分) 園吉は長崎から大坂島之内に住み替える。園吉と梅吉は互いの不遇を託ちながら、しみじみと語り合う。翌朝千日前の法善寺の境内で、お万の兄の大六が喧嘩し、お万がそれを止める。お万は大六と茶店に行き、鬼島武雄が大六と名を変えた理由は、小泉梅三郎の仇討ちが怖いからだろうと問う。また、お万が惚れていた今木藤十郎の娘が園吉と名乗って芸妓となっていることもお万の口から語られる。(以上 1 月 12 日分) お万は、梅吉から逃げようとする大六に対して、梅吉を謀殺しようと持ちかける。お万は梅吉の恋敵である鷺津を利用して梅吉を殺そうと計画し、鷺津と大六を引き合わせる。(以上 1 月 13 日分) 鷺津と大六は梅吉に喧嘩を仕掛け、役人に捕縛させる計画を実行するための相談をする。鷺津は梅吉に喧嘩を仕掛ける男に斧蔵という相撲取りを選ぶ。(以上 1 月 14 日分) 髪結の受け宿を兼ねている大坂阿波座の杵屋で、梅吉と宿の手代の新八が話し合う。新八は、梅吉の財布に三両あまり入っていること、財布から麝香の香りがすることに不審を抱き質問する。そんな中、斧蔵がやって来て、昨日十八庵で芸妓の金が無くなったと言う。(以上 1 月 15 日分) 斧蔵は、梅吉に強請がましくせまる。斧蔵は梅吉の手ぬぐいを出し、これが十八庵の芸妓の部屋から見つかったと言う。新八は梅吉の肩を持つように見え、実は大六から金をもらって喧嘩の種を播く魂胆で、斧蔵に楯突き二人の対立を煽る。(以上 1 月 16 日分) 梅吉は新八から出刃包丁を渡さ

れるが、喧嘩を避けてそれを投げ捨てる。その時、捕吏がやって来て、梅吉を町会所に連れて行く。吟味を行う同心等は鷺塚の指図を受けており、厳しい吟味が行われる。梅吉は三両の金は園吉から貰ったものだと答える。同心の館林は梅吉が芸妓から三両の金を盗んだのは疑いないと決め付ける。梅吉が無実を訴えると、拷問によって自白させようとし、岩五郎に棒打ちさせる。(以上1月17日分) 梅吉の拷問を見かねた園吉は館林に自分が金を渡したと申し述べるが、館林はそれを聞かず梅吉の拷問を続ける。園吉が会所から追い出されて家に帰ると、鷺塚から口がかかっており、園吉は鷺塚に梅吉を助けてもらおうと考える。鷺塚は梅吉の依頼を引き受けるかわりに、自分の願いも叶えるよう約束する。(以上1月19日分) 鷺塚は園吉の願いを聞き、梅吉を牢死ということにして密かに番所から出してやろうと述べる。園吉は、一旦鷺塚の元を去るが、梅吉のために操を守っていたが、梅吉のために他の男に肌を許してしまうことになり思い悩む。(以上1月20日分) 園吉が途方に暮れていると、田舎人の風体をした男が声をかけ、鷺塚の無法を憎み園吉に手を貸そうと言う。園吉がこれまでの次第を話すと、男は明日までに梅吉の命は助けるから鷺塚に身を任せる必要は無いと言う。男は、田舎人に身をやつして世情の動静を探っていた西町奉行松平周防守であった。(以上1月21日分) 鷺塚が難波村の魚虎で寝っていると、西役所から呼び出される。松平は鷺塚に対して、与力が裁きにあたって依怙や専横をすることが無いか尋ねる。(以上1月22日分) 松平は、西役所の与力で南地島之内の園吉という芸妓に凝って、

園吉の情夫の梅吉を謀殺しようと計画しているものがあるという噂について鷺塚に尋ねる。鷺塚はその噂を否定し、直ぐさま梅吉を出獄させる。梅吉が園吉の元へ行こうとする途次、ぼったり鬼島竹武雄に出くわす。(以上1月23日分) 園吉の妓宅に梅吉が寝ており、その側で園吉が介抱している。梅吉は、入牢中の拷問で身体が弱っていたのもあって、鬼島に踏みつけにされた挙げ句、上本町橋の東堀へ投げ込まれたが、折良く島之内の常客の船頭に救われて園吉の宅へ送られたのであった。(以上1月24日分) 園吉の妹分にあたる舞妓の雛子は梅吉の看病の手伝いなどをする。梅吉が快方した後、園吉は座敷へ出たり芝居の稽古をしたりするが、園吉が留守の間、梅吉と雛子が睦まじ気に語り合うことに園吉は不審を抱く。園吉は嫉妬のあまり梅吉に恨み言を言う。(以上1月26日分) 梅吉の説得も効を奏さず、園吉と梅吉は痴話喧嘩する。その時、妓丁が園吉を迎えに来て喧嘩は立ち消えとなる。芸子芝居で園吉は妹背山のおみわを演じるが、その最中に客席から梅吉と雛子の噂が聞こえてくる。(以上1月27日分) 園吉が雛子の楽屋へ行くと、そこに梅吉もいる。梅吉は楽屋裏で仇敵と出会い隠れるために雛子の楽屋へ入ったと述べるが、園吉は聞く耳を持たない。梅吉は堪忍袋の緒が切れ園吉に離縁を申し出る。(以上1月28日分) 園吉が楽屋を出て小屋の出口へ向かう途次、お万とお熊が園吉の噂をしているのを立ち聞きする。二人の会話で、お万の弟子の大六が鬼島武雄であること、お万が武雄の妹であること、お万が鷺塚に頼んで梅吉を殺そうとした計略、雛子に金を渡して梅吉が寝ている部屋へ毎日遊びに

行かせたことなどが知られる。(以上 1 月 29 日分) 大坂千日前で園吉はお万を待ち伏せする。やって来たお万を捕まえ、武雄の居場所を聞き、お万の命を奪おうと切りつける。(以上 1 月 31 日分) この時、梅吉が現れ園吉の所為を褒める。梅吉はお万の顔を砂地に擦りつけ懲らしめる。その時、武雄がやって来て、梅吉と園吉は仇討ちを果たす。梅吉は、赤ヶ崎に帰参を許され、知行も昔のままに与えられ、改めて園吉を妻に迎える。(以上 2 月 2 日分)

【備考】「第二回」～「大団円」。「第一回」のみ欠号。

【題名】百万円

【記者】未詳

【掲載日】1892/1/31

【梗概】「今度は余りチヨン髯も面白くないからと作者が新趣向、意匠をこらした明治今日の浮世小説は散髪ものゝ(改行)百万円(改行)と云ふ寄童立身して民権家の実業紳士になるの新奇抜の続物を掲載すれば旧に倍し御愛読のほど偏へに祈るになん」

【備考】「●新小説の披露」。欠号あり。